

カージャー朝下におけるケシ栽培と 1870-71年大飢饉

岡崎正孝

はしがき

イラン社会の特徴の一つとして、A. K. S. ラムトンは Insecurity をあげているが、19世紀後半は庶民にとって「不安」に満ちた時代であった。都市の住民は食糧不足とパン価格の高騰に苦しみ、飢饉にもしばしば見舞われた。この時代の「不安」の源泉は、「パン問題」であった。

19世紀後半には、大飢饉が幾度も起こった。たとえば、1859/60年冬、豪雨と豪雪によりアゼルバイジャンやケルマーンなど穀倉地帯からテヘランへの小麦の輸送が途絶えたため、2月にテヘランは極度のパン不足に陥り、数千人の女性によるパン騒動が発生している¹⁾。

とりわけ悲惨をきわめたのは、1870-71年、イラン東部・中部・南部を襲った大飢饉である。この飢饉では、大量の餓死者が出たほか、食人も見られ、全人口の約20%の減少を招

1) 2月28日には、数千人の女性が狩りから帰ってきたシャーを取り囲み、シャーの面前でパン屋を襲った。翌3月1日にも、「パンよこせ」と叫ぶ女性が城内になだれこみ、警備兵と衝突した。この日の騒動は、シャーが市長(Kalantar)を群衆の面前で処刑し、テヘランのすべての地区長(Kadkhoda-ye mahalleh)を鞭打ち刑にしてようやく収まった。しかし、翌日になると、シャーは「怒りの赤服」を着て、群衆の前に現れ、テヘラン中の女を八つ裂きにすると脅したため、怒り狂った群衆はモスクに押し寄せ、イマーム・ジョムエは命からがら逃げ出すという有様であった。彼らは英国とロシアの領事館に向かい、食糧の放出をシャーに勧告するよう領事に依頼した。この騒動は4月になってシャーが備蓄の小麦を放出し、ようやく収まった[Wheeler: 102-03; Eastwick: 288-91]。

いた。まさに、これは19世紀イラン最大の惨劇であった。

さて、この飢饉の要因について欧米の学界では論争がある。19世紀後半、外国製品の輸入の増加が輸出品としての農産物の生産増大をうながし、綿花、米、タバコ、乾果、アヘンなどの生産が増大した。商業的農業の進展をみたわけであるが、N. R. ケディーは、「かつての麦作地におけるケシ作化が一連の早魃と重なり、この飢饉を生んだ」とし [Keddie 1972 : 69], 利益の多いアヘンの生産を増やすために麦畑がケシ畑に変わり、これが飢饉の誘因になったとしている。そして、この説は G. ギルバーや A. セイフによっても支持され、ほぼ定説化しているといつてよい [Gilber 1976-77 : 135 ; Seyf : 237]。

これに対し、V. ノウシールヴァーニーとN. パークダーマンは、論証はしていないが、60年代にケシ作面積が増大したのは事実として認めながらも、ケシ作が飢饉の誘因となるほど小麦の生産を減らしたであろうかと、前説に疑問を呈している [Pakdaman : 131 ; Nowshirvani : 14]。

筆者もケディー説に疑問をもっているが、本稿では、ケシ作の進展が飢饉と関連性を有していたか否かを検証し、さらに高官・大地主・宗教家など有力者による退蔵・価格操作の実態を紹介することにより、この大飢饉の特徴を明らかにしてみたい。

なお、筆者はすでに *The Great Persian Famine of 1870-71* (BSOAS, 1986) を発表しているが、本稿はこれを大幅に加筆したものであることを断っておきたい。

I 1870-71年大飢饉

1869-70年の冬、イランでは広い地域にわたりほとんど降水がなく、また70-71年の冬も西部・北部・南部を除き雨と雪の恩恵に浴さなかった。2年間に一滴の雨も降らなかった地域もあった。とくに、東部のホラーサーン、中部のエスファハーンとヤズド、南部のファールスなどでは早魃の被害は甚だしかった。多くの川や泉が枯れたほか、エスファハーンのザーヤンデルド(川)は1871年には完全に干上がり、灌漑作物(アービー)は甚大な被害を被った。

早魃の当然の結果として、食糧の価格が高騰し、各地でパン騒動が発生した。たとえば、ブーシェヘルでは71年6月17日(小麦は1ハルヴァールあたり7.5トマンに、パンは1タブリーズ・マンあたり9シャーヒーになった)、小麦を輸出していた英商会を2000人の群衆が襲い、構内に乱入して積荷作業を妨害するなど大騒動になった。町長は治安を保ちえず、駐テヘラン英公使のアリスンがインド政庁ブーシェヘル駐在(Political Resident)のペリー(Lt-Col. Lewis Pelly)に対し、ブーシェヘル町当局を通して小麦を適正価格で放

出するように指示し、ようやく29日に町は平静を取り戻した[FO, 60/327: June 22, 25, 28, 29, 1870]。

またコムでは、7月に「パンよこせ」と叫び、胸を叩きながら行進するデモが10日間も続き、7月26日には2000人の男女が電信局に押し寄せ、シャーに抗議電報を打ち、英公使に事態を伝えるように局員に強要し、返事が届くまで局内に座り込みをした[FO, 60/325: July 26, 1870]。

平時でも小麦の自給ができず、ファールスやケルマンシャーから輸入していたエスファハーンでは、小麦の値上がりは著しかった。テヘランでは7月に平年値の3.5トマン(ハルヴァールあたり、小麦は以下同じ)から5.5トマンに上がったにすぎなかったが[FO, 60/327: July 18, 1870]、エスファハーンでは通常の3倍にもなり、パンは1タブリーズ・マンあたり30シャーヒーになった。プーシェヘルではパンは、9シャーヒーであったと考えあわせると、エスファハーンの主穀騰貴の異常さがわかる。当然、パン騒動が起こった。セイエドや女性たちはシャーに抗議電報を打とうと電信局に押し寄せ²⁾、官憲との間ではげしい衝突が起こった[FO, 69/327: July 6, 1870]。

エスファハーン、ヤズドとともに被害の甚だしかったホラーサーンでも麦価は高騰した。同地方南部のピールジャンドでは、ノウルーズ月中頃(4月上旬)に小麦は9トマンになり、餓死者もで、同地方のカーエンではわずか数キログラムの小麦粉が原因で殺人事件が起きた。また、トルバトでは死んだ犬に人が群がり、一人の青年が殺され、食べられるという惨状が発生した[Razavānī: 148-49]。

1871年になると事態はさらに悪化した。麦価は激しい勢いで騰貴し、たとえばマシュハドでは5月に小麦は50トマンでも手に入らなくなり[FO, 60/334: May 29, 1871]、カーシャーンでは平時の20倍をこす100トマンにもなった。この地方は平年でも4か月分の小麦しか自給できなかったため、事態は深刻であった[Narāqī: 264]。エスファハーン同様、自給率が低く、ファールスから多量の麦を購入していたヤズドでも同じであった。

当時の労働者の賃金は1日1ケラーン(20シャーヒー)、年収は約20トマン[FO, 60/327: Jan. 20, 1870]、1家族の麦の年間消費量は2ハルヴァールと推定されているから、カーシャーンでは1年分の主食費は年収の10倍にも達していたことになる。食糧問題はとく

2) イランでは小作争議や農民暴動は多くの例を見ないが、パン騒動は頻発し、ここで女性が抗議活動の前面に出ていること、そして英国が作った電信線がシャーに対する直接抗議に利用されている点が注目される。

に都市部で深刻になった。

不安が高まり、騒動は激しさを増した。たとえば4月にはシーラーズで大騒動が起き [FO, 60/334 : April 29, 1871], 8月には、有力者による麦の退蔵をシャーが黙過しているとの噂が広まったことからテヘランで騒動が発生し、デモ隊の女性たちと近衛兵との激しい衝突では多数の負傷者を出した [FO, 60/335 : August 16, 1871]。

多くの人々が食糧事情のよい地方へ移動した。プーシェヘルへはファールスをはじめ各地から多くの難民が流入したが、その多くは餓死寸前で、動ける者は残飯をあさり、ロバの糞で飢えをしのぐという有様であった [FO, 60/334 : May 3, 1871]。また、カスピ海沿岸のギーラーンへは5月ころから難民が大挙流入し、11月までにはその数は2～3万人に達した [FO, 60/338 : Nov. 20, 1871]。ちなみに当時のギーラーンの人口は10万人と推定されている。また、国境を越え、ロシアへ逃れる者も出た [FO, 60/338 : Dec. 18, 1871]。

深刻なパンの不足と高価格は悲惨な事態を招いた。パンを買う力のない者は死獣の肉も食べた。餓死したラクダやラバなどに人々が群がり、我先にと肉を奪いあった。71年の冬、テヘランからエスファハーンへ向かっていたシーラーズ電信局の医師ベイカー (J. B. Baker) はコム近辺で住民に襲われた。飢えた村民たちはベイカーの馬を撃ち殺し、1時間もたたぬまに馬は骨と皮しか残さなかった。ただここは他の所よりはいくらかよく、彼らはその場で生肉を食べず、家に持ち帰った、とベイカーは伝えている [FO, 60/336 : Dec. 1, 1871]。プーシェヘルとシーラーズの間では、草だけで飢えをしのぐ村が多くあったことも報告されている [FO, 60/334 : May 3, 1871]。『コム誌』によると、この地方では犬や猫は飢えた住民の犠牲となって1匹もいなくなり、アリの巣まで掘りおこして食べる者も出、ネズミは恐れをなして姿を見せなくなったという [TQ : 60]。

陰惨をきわめたのは食人 (カニバリズム) である。アンサーリーが「飢饉、人食いを流行らす、1288 (1871)」と書いているように [Anṣārī : 50], 飢饉の被害の甚だしかった中部地方ではカニバリズムがみられた。

たとえば、カーシャーンではイスラム教徒がユダヤ人の死体にまで群がり [Naraqī : 264], エスファハーン、コム、ヤズドなどでは、墓場を荒らし死体を掘りかえす者や子供をさらって食べる者が多くでたし [FO, 60/334 : May 3, 1871], 自分の子供を殺して食べる親もいた [Anṣārī : 278]。コムでは人さらいを恐れて一人歩きをする者はなかったというし、『コム誌』の著者の縁者の一人も行方不明になった。コムの郊外にすくっていた無頼漢たちは食べ物を探している女性たちを食べ物があると偽っておびき寄せ、殺して食べた

とされている [TQ : 60]。このほか筆舌に尽くし難い惨状を地誌や英領事報告は伝えている。

1872年春にも飢饉状態は続いていた。インドからブーシェヘル、エスファハーン、テヘランを通してロンドンに帰った W・ブリットルバンクは *Persia during Famine* (p. 180) において、彼が72年4月にエスファハーン近くのキャラバンサライを通りかかった時、目や口から黒い液体の流れ出ている一つの死体を見たが、その何メートルか先には飢えた2人の男と1人の女が狼のような目で死体をにらみ、今にも死体にとびかからんばかりであった、など飢饉の惨状を生々しく伝えている。

当然のことながら餓死者が多く出た。マシュハドからの報告によると、小麦が50トマンになった71年5月には日に500人以上が餓死し、死体が何日間も道路に放置されるという有様であった [FO, 60/334 : May 1, 1871]。エスファハーンでも日に数百人が死亡し、テヘランでも多くの餓死者を出した。同じく5月にブーシェヘルからエスファハーンへ旅行した電信局のスミス (R. M. Smith) によると、死体の転がっていない所はなかった [FO, 60/334 : May 3, 1871]。テヘランでも72年2月に飢えと寒さのため日に200人を越す死者がでた³⁾。

コレラはイランでも頻発した。1889/90年度のインド政庁ブーシェヘル駐在報告によると、1821年から89年までの70年ほどの間に214件のコレラの発生が伝えられている。この大飢饉時にも、衛生状態の悪化と栄養失調によってコレラが発生した。たとえば、71年2月13日、ブーシェヘルでコレラが発生 [PGAR, 1889/90 : 17 ; AP, Tabreez, 1872 : 1190]、飢饉の被災地へ蔓延し、とくに中部イランでは被害が大きかった⁴⁾。

餓死やコレラの発生、人口の移動は、大幅な人口減少を招いた。コムは1284(1867/68)年の人口調査では2万5382人の人口を擁していたが、飢饉後の1291(1874/75)年の調査によると1万4000人に減少してしまった [TQ : 29]。他の若干の例をあげると、サブザヴァー

3) *Āyandeh*, vol. 10, no. 4/5, 1984, p. 302. 1288年ズルカアダ月24日曜日 (Feb. 4, 1872) 付の文書。イーラジュ・アフシャル氏の御好意による。1872年4月のテヘランでは小麦は20トマン、パンは3 qerān/mann-e tabriz もしており、この文書の著者は5時間並んでようやくパン半切れが買えただけであった。

4) コレラの発生と半英感情の高まりについて論じた次の論文がある。R. M. Burrell, "The 1904 Epidemic of Cholera in Persia : Some Aspects of Qājār Society", *BSOAS*, 51-2 (1988), 258-70.

ルでは3万人が1万人に[Curzon, I : 264], カーシャーンでは1000人の人口のあった村がわずか200人になり[Naraqī : 261], ファールスのカーゼルーンでは日に20人を越す死亡者がで、離村者が続出したため、人口は3分の1になった[FO, 60/334 : May 3, 1871]。また、カンガーヴァルでは飢饉前には2500人であったが、1000人に減ってしまった[GP, III : 311]。

飢饉の被害は農村部よりも都市のほうが大きかったが、とりわけヤズド、エスファハーン、マシュハドの被害は著しく、サント・ジョーンはこれらの都市では少なくとも人口の3分の1は減少したと述べている[St. John : 98]。人口問題に関する専論においてギルバーは、この飢饉による人口減少を150万人と推定しており[Gilbar 1976 : 143-44], 飢饉直前の人口は950万人ほどとされているから[Lambton 1987 : 45], 飢饉は人口の17%近くを奪ったことになる。

飢饉は経済活動のさまざまな分野に大きな影響を及ぼした。土地所有についてみると、税金の支払えない中小地主の中には、土地で物納する者や、有力者に土地を譲渡する者がでた[Anṣārī : 50, 278]。多くの村が荒廃し、弱小地主や自作農の土地喪失、有力者への土地の兼併が進んだ。

牧畜も甚大な被害を被った。タブリーズ駐在英領事ジョーンズが「遊牧部族が最大の犠牲者である」と言っているように[AP, Tabreez, 1872 : 1190], 旱魃による牧草不足によって家畜が大量に餓死し、多数の遊牧民が貧窮化した。遊牧を止め、労働者として都市や農村に定着を余儀なくされた者が多くでたため、弱体化した部族もあった[St. John : 95 ; Curzon, II : 113]。

さらに、ラバやラクダなどの餓死による家畜の不足も深刻な問題であった。麦の輸送量が大幅に減少したほか、役畜の借料が高騰し(飢饉前の5倍以上)、これが飢饉の緩和を妨げる1つの要因となった[AP, Tabreez, 1873 : 968 ; FO, 60/334 : May 3, 1871]。

さらに治安も悪化した。多くの村や町が部族民の掠奪により大きな被害を被った。

II ケシ作の進展

インド政庁ブーシェヘル副駐在(Unconvenanted Assistant)のルーカス(G. Lucas)はアヘン貿易に関する報告書(1875)の中で、次のように述べている[Lucas : 27]。

「利益のあがる輸出用作物(ケシ)を栽培し、それによって収入を増やそうとする住民の試みと、生活に必要な不可欠な穀物の供給を軽視したことが、旱魃と重なり、1871-72年の飢饉をもたらした。」

大飢饉をケシ作の進展に関連づけるための論拠になっているのは、ルーカスのこの記述である。

しかし、はたして60年代のケシ作が小麦の生産を大きく減少させるまでに伸びたのであろうか。

サファヴィー朝下(1501-1722)でアヘンの消費と生産が増加し、17世紀にはケシ作は多くの地方に普及し、18世紀末になると少量ではあるがブーシェヘルから輸出されるに至った[岡崎 1980:72]。

アヘン貿易を独占していた東インド会社がインドの港で積み替えられる外国産のアヘンに対し高率の関税を課しており、これが輸送コストの最も安いインド経由のアヘン貿易の伸びの障害となっていたが⁵⁾、30年代になると安価なイラン・アヘンはトルコ・アヘンとともに香港の市場で需要がたかまり、生産も輸出も増えた。トルコ政府のユダヤ人追放により1832年にバグダードを去りブーシェヘルへ来ていたデイヴィッド・サッスーンはここで大量のアヘン取り引きを行い、巨万の富を得たが、彼は当時のアヘン商の一人であった(サッスーンはのちにボンベイへ移り、商業・銀行経営にのりだし、インドにおける富豪の一人となった)。

ペルシア湾貿易の拡大を図っていたイギリスにとってイランからの輸出品を探すことが急務であった。この候補となったのがアヘンとタバコであり、48年には南ペルシアの開発に関連し、英領事はアヘンとタバコの生産増をイラン政府に奨励するよう、本国政府に提言している⁶⁾。

50年代になるとケシ栽培は新時代に入った。近代化論者で、1870年代に宰相として活躍したミールザー・ホセイン・ハーン(Mirza Hosein Khan Sepahsalar)は、領事としてボンベイに滞在中(1266-69:1849/50-1852/53)、輸出拡大のためにケシの栽培を増大する

5) Olson:152. インドの高率関税(40年代末には100%)を避けるため、イラン・アヘンはジャヴァに運ばれ(1866年頃)、ここでシンガポールやホンコン行きの船に積み替えられていた。しかし、オランダ政府がトランジットも含めアヘンの輸入を禁止したため、アデン経由、さらに非課税のスエズに運ばれ、ここから、Peninsular and Oriental Companyの船でホンコンに運ばれた[Lucas:27; PGAR, 1878-79:28]。

6) FO, 60/143: Miller to Palmerstone, August 21, 1848. 1849/50年に南ペルシアを調査旅行したタブリーズ駐在英領事のK・アパットもアヘンの生産が伸びればこの国にとって大きな利益になると報告している。

よう政府に献言した。農産物輸出拡大の道を模索していた宰相のアミール・キャビールはこれを受入れ、1267(1850/51)年にテヘランでケシの試験栽培を行った。そして、1859年に生産高は300箱ほどになり、61年には約1000箱が輸出されるに至った。

ケシ作発展の担い手として重要な役割を演じた人物に、エスファハーンの大商人マフディー・アルバーブ(Moḥammad Mahdī b. Moḥammad Reḡā Arbāb Eṣfahānī)がいる。彼は商用で1850年前半にボンベイに渡り、当地のパールシーから栽培・アヘン精製法を学び、1273(1856/57)年エスファハーンに戻った。彼は大地主でもあり、自己の所有地でケシ栽培を行い、さらにアヘン商人として他の地主にケシ栽培を奨励し、エスファハーン、ヤズドをはじめ各地でケシ栽培の普及に努めた。そして、80年代初めにはアヘン精製・輸出のために「エスファハーン・アヘン商会(Kompānī-ye Teryāk-e Eṣfahān)を他の商人たちと設立、アヘン貿易の業務を拡大している[Ashraf : 76 ; E'temad al-Saltaneh : 105]。ナジュモル・モルクがいうように、彼はイランにおけるケシ作の普及者であった[Najm al-Molk : 177]。

イランのアヘンは栽培法・精製法ともに未熟で、品質も悪く、市場での評判も悪かったが[Abbott : 100]、彼の帰国の数年後には、エスファハーン産アヘンに対する需要も高まった。1866年の領事報告によると、エスファハーン・アヘンに対する需要が増大し[AP, 1867/69, Teheran : 301]、この頃アヘン生産が急激に伸びたようである。さらに69年の同じ報告によると、イラン・アヘンは海路、中国へ送られており、イランの商人たちは大きな利益をあげている。栽培適地ではどこでもケシが栽培され、テヘランやその他の地域でもケシ栽培が始まった。その結果、68/69年には、生産は15,500シャー・マン(約209,250 lbs)に達し、国内で600-700シャー・マンが消費され、残りがバタビア経由、中国へ輸

出された[Thomson]。

ヤズドは古くからのアヘンの主産地であった。ここではゾロアスター教徒の農民がケシを栽培しており、良質のアヘンが生産されていた[Abbott : 81, 105]。カーシャーンの一部でもかなり古くからケシ作が行われており、麦とカブの後作に栽培されていた[Abbott : 76, 122 ; Zarrabi : 170]。ファールスでは40年代にシーラーズ、カーゼルーン、

表1 地方別アヘン生産高(推定)
(単位: チェスト)

	1868/69	1869/70
エスファハーン	700	1,300
ヤズド	500	850
ホラーサーン	100	100
ケルマーン	100	150
ファールス*	150	200
シュージュタル	10	10
計	1,560	2,610

*ネイリーズ, シーラーズ, カーゼルーン
(出所 Lucas : 28)

エスタフバーナートで少量のアヘンが生産されており、1285(1868/69)年にはネイリーズでも栽培が始まった[Fasa'ī, II : 3 ; Abbott : 116]。

このように60年代にアヘンの生産は伸びた。しかし、表1から明らかなように、この時期のアヘン生産はエスファハーンとヤズドが中心で、それ以外の地域では萌芽期にすぎなかった。マクレガーの地名事典(1871年)を見ても、エスファハーン、ヤズド以外でケシ栽培が行われていた村はそう多くない。

Ⅲ エスファハーンにおけるケシ作と飢饉

(生産法)

ケシの栽培法にも地域差があるが、エスファハーンでは次のようである。8月下旬から9月上旬にかけて施肥をしてから耕運し、十分に灌水したのち、10月から12月にかけて播種する。葉が2-3枚になったら間引きし、丹念に除草する。ノウルーズ(3月下旬)から、花をつける4月下旬まで必要に応じ灌漑する。春の終わり(5月下旬から6月下旬)にケシ坊主ができ、収穫作業が始まる(地域差があり8月まで続く)。

夜明け前、ケシ坊主に鋭利なナイフで4-5箇所たてに2-3センチほどの傷をつけ、流れてた汁液が乾くのをまち、午後、これを削り取る。この生アヘン(teryāk-e khām, crude opium)を銅のボウルに入れ、天日で乾かし、漆を練るように木のへらで練り、重さ300グラムほど、太さ親指くらいのロウソク状にし(teryāk-e māltde tamām shode, raw opium)、ブドウかイチジクの葉に包む。これを箱に192-196個つめ、1箱(チェスト)の重さが10.5シャー・マン(約63kg)になるようにする(ホンコンについた時、1ピクル[担、約60kg, 135 lbs.]になるようにする)[岡崎 1980 : 75 ; Shahnnavaz : 500-01 ; NJ : 124-25]。

(収量と作付面積)

当時のアヘンの収量については若干のデータがある。英国公使館書記官のW. ベアリングはアヘンに関する報告書(1881)において、エスファハーンにおける収量は平年作で1ジャリーブ(0.1 ha)あたり1シャー・マン(約6 kg)としている[Baring : 3]。これに対し、19世紀の地誌『エスファハーン地誌』は0.5シャーマン(=1タブリーズ・マン)、アヘン問題が国際問題化した1920年代にイラン公使館の医務官としたテヘランに滞在し、アヘン問題の専書をもつA. ネリガンも同じく1タブリーズ・マンとしている[JE : 55 ; Neligan : 16]。さらに、1926年の国際連盟の調査報告書では、5 lbs(=2.25kg)となっている(Shahnnavaz : 595)。アヘン問題専門家のあげるデータのほうが信憑性がより高いと考えるのが自然で、これは地誌の数値とも一致しており、ここではジャリーブあたり1タブ

リーズ・マンをとる⁷⁾。

NJ[124-25]によると、10.5シャー・マンの精製アヘン(練りアヘン)1チェストを作るのに、15シャー・マンの生アヘンが必要である。つまり、生アヘンの70%の重さの練りアヘンが得られることになる(領事報告も182 lbsの生アヘンからその70%の130 lbsの練りアヘンが出来るとしている[AP, Ispahan, 1894:17])。

すでに述べたように、飢饉直前の1869年度のエスファハーンの生産高(推定)は1300箱(チェスト)であった。では、1300チェストのアヘンを生産するために、どれほどの土地が

ケシ作にあてられていたのであろうか。

1チェストは15シャー・マンの生アヘンから作られるから、1300チェストは19,500シャー・マンになる。ジャリーブあたりの収量は1タブリーズ・マン(0.5シャー・マン)であるから、生アヘン19,500シャー・マンを生産するには、39,000ジャリーブ、つまり3900ヘクタールの土地が必要になる。

エスファハーンのザーヤンデルドの流域にあって、この川から水を引いていた村落の数は、『エスファハーン地誌』によると674村である[JE:38]。水掛かりのよいこれらの村のみでケシ作が行われていたと仮定しても、1村落平均のケシ畑はわずか6ヘクタール弱にすぎない。ケシ作は川の流域のみならず、他の村でも行われていたことが地誌の記述より明らかであり、1村落平均のケシ畑の面積

表2 ベルシア湾諸港からのアヘンの輸出
(単位:チェスト)

1859	300	1884	4,008
1861	1,000	1885	4,993
1866	950	1886	6,081
1867	1,500	1887	4,544
1868	1,545	1888	4,087
1869	2,540	1889	5,186
1870	1,230	1890	6,200
1871	870	1891	6,120
1872	1,400	1892	6,163
1873	2,000	1893	4,089
1874	2,002	1894	4,242
1875	1,890	1895	3,168
1876	2,570	1896	3,462
1877	4,730	1897	4,667
1878	5,900	1898	4,248
1879	5,921	1899	5,312
1880	6,122	1900	4,915
1881	7,475	1901	—
1882	6,672	1902	4,439
1883	5,066	1903	5,847

(PGAR, APより作成)

はこれより少なくなる。ちなみにエスファハーン州の1村落あたりの作付け面積は約100

7) なお、インドにおける実験では、1エーカーあたり50 lbs.(=23kg)とされており、これはジャリーブあたり1.875 mann-e tabrizになる。ケシ作の先進国における実験値よりも、後発国イランの収量が少ないとみるのが自然であろう[加藤祐三『イギリスとアジア』岩波新書 1980,167]。

ヘクタールであり、ケシ作のウエイトは決して高くなかった。

エスファハーンはアヘンの生産地であったが、表2から明らかなように、イランでアヘン生産が急増し、主要輸出品となったのは77年以降である。60年代には、ケシ畑は大きな面積を占めてはいなかった。地誌やヨーロッパの旅行記、地名事典などには、当時の農業はいぜとんとして麦作中心であったことを教えているのである。

本節の冒頭に示したように、ケシ作は高度な技術を要し、労働集約的である。施肥もするし、除草は丹念に行わねばならない。また、ケシ坊主に傷をつけるとき、内部の種を切らないように注意しなくてはならない。C. J. ウイルスによると、ケシ坊主に傷をつけるとき、「労働者たちは、アヘン採取の方法に関して他のどのペルシア人よりもたけているヤズドの農民の監督のもとで作業をする」と述べている[Wills: 173]。この作業は単純労働ではなく、技術と根気のいる仕事であった。

さらに、管理の問題がある。マシュハドのイマーム・レザー廟のワクフ地の管理人の手紙が近年紹介されたが、この中で管理人は、地主にとって早魃よりもバッタよりも遊牧民の掠奪よりもこわいのは農民のごまかしであり、よほど注意して農民を管理監督しないと、収穫物は盗まれ、土地を経営する意味がなくなる、と述べている。マシュハドでは収穫期に地主は盗難防止のため、ケシ畑にテントを張って夜警を置き、さらに農民の中にスパイを放っておいたという[Gurney: 144-45]。農民と地主のこのような関係は他地域でも等しく見られ、アヘン作の場合にはとくに地主は細心の注意を払い、農民の管理を強めなくてはならなかった。

1860年代には、ケシ栽培は、土地生産性が高く、ケシ栽培技術をもつ農民が得られ、さらに地主にとって管理が容易な土地のみで大規模に行われたものと考えられる。おそらく、町の近郊のこのような要件をみたす村では、麦畑や野菜畑がケシ畑に変わったのであろう。ケシ作への転換が進み、一面ケシの花が咲き乱れる所もあったと考えられる。このような村もあったという点では、ルーカスの観察は誤りではない。

しかし、ザーヤンデルードの全域にわたり穀作からケシ作への転換が大々的に進んだとは考えられない。もしそうであったなら、エスファハーンからの輸出は数倍に達していたはずであるが、事実は、先にも述べたように、1村落平均で6ヘクタールにも達していなかったのである。

麦畑がケシ畑に変わった村では、麦の生産が減少したのは事実である。しかし、これでもって、エスファハーン地方の麦の生産高が著しく減少したとは言えない。当時、商品生産に対する需要が増大し、商人や地主によって土地の開墾が進み、作付面積は増加した。

優等地がケシ畑に変わったとしても、新開地では麦作が行われた。さらに、麦は当時の重要な輸出品であり、栽培が容易で、伝統的な小作制でもって生産可能な麦の生産を地主たちは決して無視するようなことはなかったのである。事実、インド政庁ブーシェヘル駐在は、1860年代末には南ペルシアでは綿作が減り麦作が増大している、と報告している [Précis : 30]。つまり、少なくとも60年代には、ケシ作はその主産地においてもモノカルチュアの色彩をもたず、飢饉の誘因となるほど麦の生産は減少していなかった、と結論してよい。

IV 飢饉と小麦の退蔵

では、当時、小麦は潤沢に市場に出回っていたのであろうか。市場において品薄であれば、僅かな減収も麦価の高騰に直結する。また、麦の流通が円滑に行われなければ、早魃時の価格騰貴は激しくなる。

対英貿易が盛んになるにつれ、小麦は重要な輸出品になった。たとえば、1863年には1500トンの小麦が英商人によって輸出され、4000トンに達した年もあった [AP, Tehran, 1871 : 194]。65年は豊作で大量の輸出が予測され、飢饉直前の1866/67年度には1284トン (42万8094マン) がブーシェヘルからボンベイに輸出されている [AP, Tehran, 1866 : 207]。さらに19世紀中葉以降、都市の拡大に伴い、都市における麦の消費も大きく増えた。

このように、国の内外における麦の需要増大の結果、穀物取引はいつそう活発になった。そして、これは悪徳商人に市場操作の機会をより多く与えることになった。凶作時は商人にとっては暴利をむさぼる絶好の機会であり、必ずといっていいほど退蔵・市場操作が行われた。これが飢饉状況の悪化に一層の拍車をかけることになったのである。1870-71年の大飢饉時もその例外ではなかった。

1870-71年の冬には西部と南部イランで雪と雨が降り、71年これらの地方ではかなりの収穫があったが、大穀物商でもあった地主たちは値上がりを見込んで、民衆の困窮には目をつむり、穀物を市場には出さなかった [St. John : 97]。また、エスファハーンの穀倉、チャハール・マハッルやフェレイドゥーンにも71年春、かなりの量の麦の在庫があった。しかし、ファールスの実力者カヴァーモル・モルクの2男で、ファールスの大地主であったエスファハーン州知事サーヘブ・ディーヴァーン (Fath 'Alī Khan Ṣāḥeb Dīvān) は、自分が所有する小麦をエスファハーンへ運んで法外な高値で売っており、値崩れを恐れた彼はチャハール・マハッル、フェレイドゥーンなどからエスファハーンへの麦の輸送

を禁止した、と伝えられている [FO, 60/334 : May 3, 1871 ; St. John : 961]。

1871/72年の冬、かなりの降水があり飢饉の終熄が期待された。しかし、民衆は苦難から開放されなかった。この年の春、エスファハーンを訪れたサント・ジョーンは次のように述べている。

「1872年4月、大量の麦がファールスからエスファハーンに向かっているとの報告がエスファハーンに届くや、すべての穀物商は店を開き、[麦の]価格は急落した。ここで最高位聖職者であるイマーム・ジョムエと税関長のラヒーム・ハーンはこの好機をとらえ、一計を案じた。彼らはシーラーズから麦が届くことを公表する一方、手下を使って秘密裏にエスファハーンの麦を買い占めた。

そして、ラヒーム・ハーンは税関長としての地位を利用して、シーラーズからのキャラバンが州境を越えるのを止めてしまった。2人の悪人はこのようにして市場を完全に掌握したため、パンの価格は一夜にして400%も上がった」[St. John : 97, n. 1]

ここでの悪役の主役は聖職者であった。

さらに、72年6月、コムでもハマダーンからテヘランへ向かう麦を満載した大キャラバンに、サント・ジョーンは会っている。これはシャーの近親者が所有するものであった [St. John : 97-98]。

このように、大飢饉時といえども麦の絶対量は不足してはいなかった。2年も早魃が続いたが、71年冬に多量の雨が降り、翌年の豊作の見込みがたつや、収穫期前であるにも拘らず、麦は大量に出回っている。現実には、小麦は存在したのである。

早魃の時には、退蔵・価格操作が大々的に行われ、これが価格の異常な高騰をもたらした。ここで主役を演じたのは大量の小麦を所有する穀物商・大地主たちであり、その中には、知事はじめ政府高官や有力な聖職者も含まれていた。事例としてあげたイマーム・ジョムエの他、エスファハーン有数の大地主でもあったアガー・ナジャフィーも、麦の退蔵者として「名をはせた」高位聖職者であった⁸⁾。麦の不足はまさに人為的に作り出されたものであり、退蔵・市場操作が事態の悪化に拍車をかけ、食人や餓死などの惨状を招く要因の一つとなったのである。

シャーは救荒措置を講じないわけではなかった。テヘランでパン屋に補助金をだし、パンの値段を半額にするように命じたり [FO, 60/336 : Nov. 7, 1871], 小麦の緊急輸入のため高官の一人をアストラハンに派遣した。しかし、この高官は資金の大半を横領してし

8) アガー・ナジャフィーについては、岡崎正孝 1988 を参照されたい。

まった[Piggot : 117]⁹⁾。また、被災地の知事に穀物商などの麦の保有高を調査させ、在庫量の把握を図ったが、穀物商たちから知事へ賄賂が動いただけで、何の効果もなかった[St. John : 97]。

ナーセレッディーン・シャーにはなすすべがなかった。しかし、シャーは、この飢饉の人災的側面を認識しており、抜本的な改革の必要を痛感していた。そして、近代派・改革派の旗手、イスタンブル駐在公使であったミールザー・ホセイン・ハーンを71年11月13日、宰相に任命し、改革を行わせようとした。彼は寄付金を集め救荒事業を管理するため、有力者と外国外交官よりなる救荒委員会を作ったり、テヘランの内外に難民収容所も作り、巨額の拠金もした[Nashat : 24, 76]。しかし、翌年には飢饉は終熄をとげ、有能なこの宰相の任命は遅きに失したといえる。

ケルマーンでは知事のヴァキーロール・モルク(Moṣṭfa Qolī Khan Vakīl al-Molk)は、飢饉の兆候がみえるや、州内の麦の保有高を調査し、他州への無許可の輸出を厳禁した。そして、標準価格を定めて、それぞれの市場での販売量を規制し、その上、救済センターを設けるなどしたため、被害を最少にいとめ、一人の餓死者も出さなかった、と1872年にこの地を訪れたサント・ジョンに知事は誇らしげに語ったという[St. John : 94]。この知事は、「凶年には備蓄の食糧を人民に供給するなどして、民生の安定に努めるというイランに伝統的な統治者の義務」[岡崎 1988 : 228]を果たしたといえるが、これは例外的なことであった。政治は無為無策といってよかった¹⁰⁾。

飢饉の主因は、もちろん早魃であった。しかし、この惨害を単に天災に帰してしまうわけにはいかない。また、すでに論証したように、さらに V. F. ノウシールヴァーニーも言うように[Nowshirvani : 14]、60年代にはケシ作は小麦の生産を大きく減少さすほどには伸びておらず、ケシが飢饉の元凶ではなかった。この点、ギルバーやケディーの説は正しいとはいえない。

早魃によって麦も減収を免れえなかったが、国内には麦の蓄えはあった。中央政府や地方政庁が適切な手段を講じておれば、ケルマーンのように被害は最小限に食い止められたはずである。この飢饉の惨害を演出したのは、退蔵と市場操作によって品不足・異常な

9) 当時の最大の事業家アミーノッザルブもアストラハンから大量の小麦を輸入している。

10) 経済の疲弊による市場縮小をおそれたイギリスは1871年、Persian Famine Relief Fund を設け、主な町で義援金を配った[Wills : 252-53]。また、ファールス知事(Moḥammad Qasem Khān)は何箇所かに救貧所を設け、食事を提供した[FNN, I : 376]、とされている。

価格高騰をもたらした商人・地主・政府高官・有力聖職者などであり、彼らの行為を阻止できず、さらに適切な救荒策を講じなかった政府や知事たちであった。この飢饉の人災的側面を無視するわけにはいかない。

有力者による麦の退蔵の傾向は世紀末から立憲革命前にかけて一層顕著になり、民衆はパン価の高騰に苦しんだ。

W.フロアは、「多くの人々、とくに下層階級の人々は、憲法制定のための闘いは生活必需品(つまり、パン)を安く手にいれるための闘いであると信じていたとしても、なんら不思議はない」[Floor, 1983: 212]と述べているが、これは当時の社会状態を端的に示している。一方では、貿易の拡大、商業的農業の進展、新田開発が進んだが、他方では政治の貧困と有力者による小麦の退蔵・価格操作に都市の民衆は苦しんだ。「パン問題」が立憲革命をもたらしたと筆者は考えるが、この問題については次稿にゆずりたい。

度量衡

mann-e shāh(シャー・マン)=約6 kg
 mann-e tabriz(タブリーズ・マン)=約3 kg
 kharvār =約300kg(100 mann-e tabriz)
 qerān =20 shāhī
 tomān =10 qerān

文献表

本稿で使用する資料の略号は次の通りである。

- AP United Kingdom, *Parliamentary Papers, Accounts and Papers*.
 FO United Kingdom, Public Record Office, Foreign Office Series.
 GP Government of India, *Gazetteer of Persia*, Confidential, Calcutta, 1885.
 IOR United Kingdom, India Office Records.
 JE Mīrzā Hosein Khān-e Taḥvīrdār-e Eṣfahān, *Joghrafiyā-ye Eṣfahān*, ed., M. Sotūdeh, Tehran, 1342/1963.
 NJ Moḥammad Mahdī b. Moḥammad Rezā Arbāb Eṣfahānī, *Neṣf-e Jehān*, ed., M. Sotūdeh, Tehran, 1342/1963.
 PGAR India Office Records, *Administration Reports of the Persian Gulf Political Residency and Muscat Political Agency*.
 TQ Moḥammad Taqībek Arbāb, *Tārikh-e Dar al-Khelāfeh-ye Qom*, Qom, 1295/1878.

引用文献

Abbott, Keith

- 1851 Notes on the Trade, Manufactures and Productions of Various Cities, and Countries of Persia Visited by Consul Abbott in 1849-50, FO, 60/165, February 14, 1851 (Abbas Amanat, ed., *Cities & Trade: Consul Abbott on the Economy and Society of Iran 1847-1866*, London, 1983)

Anṣārī, Jaberī

- 1321/1943 *Tārīkh-e Esfahān va Rei*, Tehran.

Ashraf, Ahmad

- 1359/1980 *Mawānē'-ye Tārīkhī-ye Roshd-e Sarmāyehdārī dar Irān: Doureh-ye Qājār*, Tehran.

Baring, W.

- 1881 Report on Trade and Cultivation of Opium in Persia, FO, 60/449, Sept. 23, 1881.

Curzon, G. N.

- 1892 *Persia and the Persian Questions*, London.

Eastwick, E. B.

- 1864 *Journal of a Diplomat's Three Years' Residence in Persia*, London.

E'temād al-Saltāneh

- 1306/1888-9 *al-Ma'āser va al-Āsār*, Tehran.

Fasā'ī, Ḥājji Mīrzā Ḥasan-e Ḥoseīnī

- n. d. *Fārs Nāmeḥ-ye Nāserī*, Tehran.

Floor, W.

- 1983 The Creation of the Food Administration in Iran, *Iranian Studies*, 16(3/4).

Gilbar, G.

- 1976/77 Demographic Development in Late Qājār Persia, 1870-1906, *Asian and African Studies*, 2(2).

Gurney, John.

- 1983 A Qajar Household and Its Estates, *Iranian Studies*, 16(3/4).

Keddie, N. R.

- 1972 The Economic History of Iran, 1800-1914, *Iranian Studies*, 5(2/3).

Lambton, A. K. S.

- 1987 Land Tenure and Land Revenue Administration in the Nineteenth Century, *Qajar Persia*, London.

Lucas, G.

1875 Memorandum on the Cultivation and Exportation of Opium in Persia, PGAR, 1874-75.

MacGregor, C. M.

1871 *Central Asia, Part 4, Persia*, India Office Records.

Najm al-Molk

1341/1962 *Safar Nāmeḥ-ye Khūzestān*, ed. Moḥammad Dabīr Siyāqī, Tehran.

Narāqī, Ḥasan

1340/1962 *Tārīkh-e Eǰtemā'ī-ye Kashān*, Tehran.

Nashat, G.

1982 *The Origins of Modern Reform in Iran, 1870-80*, Urbana.

Neligan, A. R.

1927 *The Opium Question, with Special Reference to Persia*, London.

Nowshirvani, V. F.

1978 Aspects of the Commercialization of Agriculture, Conference Paper at Babolsar, Iran.

岡崎正孝

1980 19世紀イランにおけるケシ作の進展, 『経済研究』1980-1.

1988 19世紀末イラン社会における宗教指導者：アガー・ナジャフイーを中心に, 『評林』15.

Okazaki, Shoko

1986-a The Great Persian Famine of 1870-71, *BSOAS*, 49(3).

1986-b Qaḥṭr-ye Bozorg-e Sāl-e 1288 dar Īrān, *Āyandeh*, 12(1/3).

1986-c Arbāb, Moḥammad Maḥdī, *Encyclopaedia Iranica*, 2(3)

Olson, R.

1981 Persian Gulf Trade and the Agricultural Economy of Southern Iran in the Nineteenth Century, in M. E. Bonine & N. R. Keddie (eds.), *Continuity and Change in Modern Iran*, Albany.

Pakdaman, Naser

1983 Preface to the volume for Studies on the Economic and Social History of Iran in the Nineteenth Century, *Iranian Studies*, 16(3/4).

Piggot, J.

1874 *Persia—Ancient & Modern*, London.

Précis

1866 Persian Gulf, No. 5, Dated the 12th May 1866, extract, paragraph 1 to 5 from a Letter of the Political Resident, in *Précis on Communication in the Persian Gulf, 1801-1905*.

St. John, O.

- 1876 Narrative of a Journey through Baluchistan and Southern Persia, in J. Goldsmid (ed.) :
Eastern Persia: An Account of the Journeys of the Persian Boundary Commission 1870-71-72,
London.

Seyf, Ahmad

- 1984 Commercialization of Agriculture: Production and Trade of Opium in Persia,
1850-1906, *IJMES*, 16.

Shahnavaz, S.

- 1984 Afyūn, *Encyclopaedia Iranica*, 1(6).

Thomson, R.

- 1869 Memorandum on Opium Trade of Persia, FO, 60/321, Commercial No. 1, May 7, 1869.

Wheeler, J. Y.

- 1871 *Memorandum on Persian Affairs*, Calcutta.

Wills, C. J.

- 1891 *In the Land of the Lion and Sun or Modern Persia*, London.

Zarrābī, ‘Abd al-Raḥīm Kalāntar

- 1341/1962-63 *Tārīkh-e Kashān*, ed. Īraj Afshār, Tehran.